

4 利益計画作成のすすめ

企業経営に必要な会計は、財務会計と管理会計に大別されます。

財務会計は外部報告会計とも呼ばれ、経営成績を外部に示すことを目的として、法令などの定めに従って、財務諸表を作成することを言います。

これに対して、基礎となる情報は同じですが、様々な切り口で会計実績を集計もしくは分析することを管理会計と言います。管理会計は、内部報告会計とも言われます。財務会計と異なり、制度的に義務づけられているものではありませんが、その活用によって法人の経営発展に資するものとなります。

以下、管理会計の一手法である、損益分岐点分析について解説します。

(1) 損益分岐点分析

損益分岐点分析とは、損益計算書を利用して収益性の分析を行うことです。

損益分岐点（ブレイク イーブン ポイント）とは、収支トントン、つまり農産物等の売上高と生産販売に要する費用とが一致する売上高や販売数量のことをいい、このときの売上高を「損益分岐点売上高」といいます。売上高が損益分岐点以下に留まれば損失が生じ、それ以上になれば利益が生じることから、「採算点」とも言われます。

損益分岐点を求めるためには、まず、全ての費用を固定費と変動費に分類し、それぞれの総計を出します。

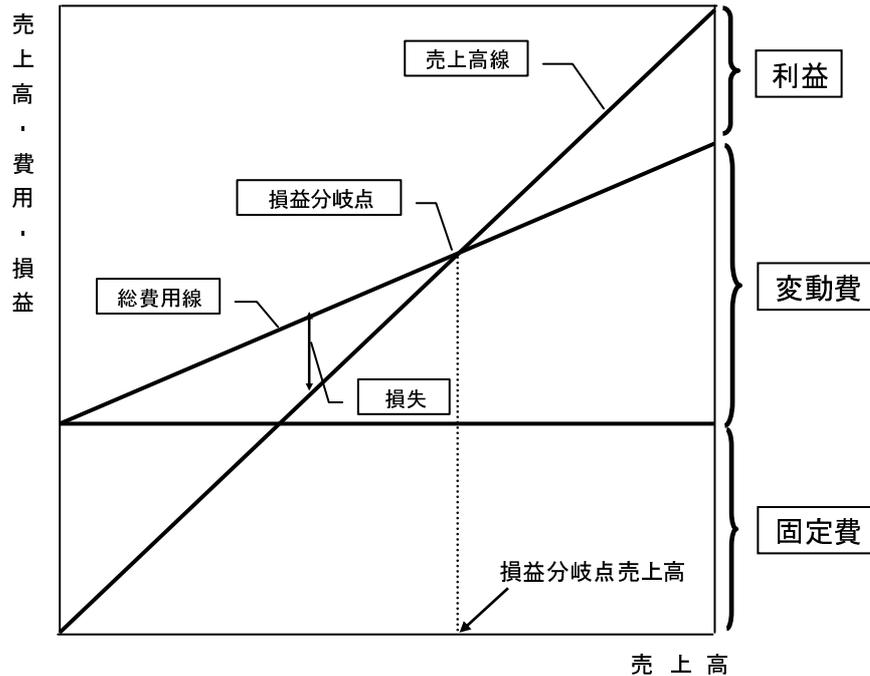
変動費は、売上高の変動にともなって変動する費用のことです。たとえば、種苗費、肥料費、労務費（作業時間に応じて支払われる）のように、製品を生産すればするほど金額が増えていく費用が変動費です。

これに対し、減価償却費や固定資産税など、売上高が変動しても変わらない費用が固定費です。これらは、製品の生産とは関係なく一定の金額が発生します。

損益分岐点は、損益分岐点図表（図VI-1）を作成し求めることもできますが、次の式で計算します。

$$\begin{aligned} \text{損益分岐点売上高} &= \text{固定費} \times \frac{1}{1 - \frac{\text{変動費}}{\text{売上高}}} \quad \leftarrow \text{貢献利益率} \\ &= \text{固定費} \div \text{貢献利益率} \end{aligned}$$

なお、損益分岐点分析には、①期中において売上高や費用の価格要素に変化がないこと、②作物の組合せに変動がないこと、③栽培体系や作業能率に変化がないことが前提条件となります。



図VI-1 損益分岐点図表（利益図表）

(2) 利益計画の作成

損益分岐点分析は、経営全体、部門別、商品別の売上・費用の目標設定を行うのに利用できます。損益分岐点を把握することで、①一定のコスト構造の中で、売上がどのように変わると利益が出るのか、②コスト構造が変わったときに、売上と費用がどのようなレベルにあれば利益が出るのか、が分かります。

ある法人が1,000万円の目標利益を上げるという目標を立てたとします。この場合、損益分岐点売上高の公式を用いることで、どれだけ売上げれば目標利益を達成できるのかが分かります。目標売上高が分かることで、利益計画を立てやすくなります。

$$\begin{aligned}
 & \text{目標利益 1,000 万円を上げる売上高} \\
 & = \text{損益分岐点売上高} + 1,000 \text{ 万円} \\
 & = (\text{固定費} + 1,000 \text{ 万円}) \div \text{貢献利益率} \quad \text{となります。}
 \end{aligned}$$

次頁の損益計算書から、1,000万円の利益を上げるための売上高を求めてみます。

$$\begin{aligned}
 \text{貢献利益率} &= (\text{売上高} - \text{変動費}) \div \text{売上高} \\
 &= (3,000 - 1,500) \div 3,000 \\
 &= 0.5
 \end{aligned}$$

$$\begin{aligned}
 & \text{目標利益 1,000 万円を上げる売上高} \\
 & = (\text{固定費} + 1,000) \div \text{貢献利益率} \\
 & = (800 + 1,000) \div 0.5 \\
 & = 3,600 \text{ 万円} \quad \text{となります。}
 \end{aligned}$$

一般的な損益計算書		
I	売上高	3,000
II	売上原価	1,500
	売上総利益	1,500
III	販売費及び一般管理費	800
	営業利益	700

← 今期は50%だが、固定費が含まれるのでいつも40%ではない

利益計画を立てにくい

「一般的な損益計算書」では、利益計画の作成ができません。そこで、「変動費・固定費で分類した損益計算書」を作成します。

この値を損益分岐点売上高の公式にあてはめて、目標売上高を計算します。

変動費・固定費で分類した損益計算書		
I	売上高	3,000
II	変動売上原価	1,200
	製造マージン	1,800
III	変動販売費	300
	貢献利益（限界利益）	1,500
IV	固定費	
	固定売上原価	300
	固定販管費	500
	営業利益	700

← いつも売上高の40%

← いつも売上高の10%

← いつも売上高の50%

← 常に一定額

利益計画を立てやすい

財務会計に基づく損益計算書では、製造原価、販売費及び一般管理費等を正確に計算し、経営成績を外部に報告することを主眼としています。これに対して変動費・固定費を利用した損益計算書は「利益計画」の作成に主眼を置いた計算方法です。

利益計画とは、どれだけ売上げると原価はいくらかかり、利益はどれだけ生じるのか、あらかじめ計算して生産・販売プランなどを練ることです。

損益分岐点分析を活用することで、これらの利益計画を作成することが可能になります。